

日本精鋇

上海に販社設立へ

アンチモン製品 年度内を計画

三酸化アンチモンの国内最大手である日本精鋇は、上海市内に全額出資による販売会社を設立する方向で検討に入った。行政当局の許可が下りれば2012年度中に立ち上げたい考え。中瀬製錬所(兵庫県)と中国現地のOEM先で製造したアンチモン製品を、現地進出の日系メーカーに販売する。将来は子会社で製造している金属粉を販売することも視野に入れている。



木嶋社長

三酸化アンチモンは樹脂の難燃助剤として、自動車や家電、化学など幅広い産業で使われている。しかし国内のアンチモン需要は

金属粉扱いも視野

10年の1万3700トから11年は1万1200トに減少した。世界的な景気減速の影響や、日本独自の要因として工場の海外移転などが関係しているとみられる。将来も日本の内需の伸びは期待できない。少子化傾向で人口の増加が見込めないことや、工場の海外移転が今後も続く可能性が高い。工場進出が相次ぐ中国に販売会社を設立することで、成長する中国の需要を取り込む。顧客サービスの強化にもつながる。今は現

地からの注文は日本の本社経由で受けている。販売会社を設立した後は、現地の会社同士でやり取りできる。まずは中瀬製錬所と中国のOEM先で製造したアンチモン化合物を販売する。ただ中国では電子部品の工場進出も加速している。このため将来は子会社の日本アトマイズ加工(千葉県)で製造している電子部品用の金属粉を販売することも視野に入れた事業展開を考えている。

中瀬の包装ライン

上期中に増強完了

日本精鋇は、中瀬製錬所の包装ラインの増強を今上期中に終わらせる。アンチモン製品の生産能力は年6400トで変わらないが、最終工程の包装ライン

では電子部品の工場進出も加速している。このため将来は子会社の日本アトマイズ加工(千葉県)で製造している電子部品用の金属粉を販売することも視野に入れた事業展開を考えている。

包する最終ラインがボトルネック。フル生産しようとするれば工程内で製品在庫が一時的に滞留し、その分リードタイムが長くなる。リードタイムが長いと、原材料のアンチモン地金の価格変動リスクが高くなる。地金価格は昨年3月に過去最高のトン1万70000を記録。足元は1万40000に下げているが、3年前の3倍近い水準だ。価格水準が高いと急落時の値幅も大きい。同社の資金負担も高騰した分だけ大きくなる。荷造りラインを倍増して生産した製品をすぐに出荷できる体制を整えることで、価格変動リスクや資金負担などを軽減できる。